

## 温泉地の活性化と大衆演劇

山路茂則

### I. はじめに

観光者が温泉地に求めるものを挙げるならば、湯・自然・施設・食事とさまざまであるが、温泉情緒というものも欠かすわけにはいかない。ところが近年、温泉情緒を体感する温泉地が減少してきた、と嘆く声をよく耳にする。

本稿では温泉旅館（ホテルを含む。以下同様）において客囲い込み策として催行される大衆劇団による公演に着目し、それを温泉情緒の復活と温泉地の活性化につながる方策の一つとして活用できないものか、について考えてみたい。

### II. 「下履き型」と「上履き型」

温泉情緒、すなわち温泉地観光をした時に受ける特有のしみじみとした味わいは、どのようにして生まれるのであろうか。

宿に着いて浴衣に着替える。タオル片手に、下駄を鳴らしながら外湯へ。湯上りの火照った体をさますために土産物屋を冷やかしたり、遊技施設で射的・スマートボールなどを楽しむ。路地裏を歩けば、その土地で暮らす人たちの生活を垣間見る。住人と声を掛け合うこともあるだろう。何処からか三昧の音が流れてくる。これらが統合されて温泉情緒なるものが醸し出されるのである。この観光スタイルをいま仮に「下履き型」と名付けておく。

さて、団体客を中心に営業してきた収容定員が大きい旅館や、廉価に利用できるのを前面に打ち出して集客している旅館は、大量に客を集め、館内において大量の消費をしてもらわないと経営を維持するのは困難である。それゆえ、旅館の三大商品たる施設設備・食事・サービスの徹底した合理化はいうまでもなく、客が館内でできるだけ多くの金を落とすのを期待する。そのための仕掛けとして館内に土産物ショップをはじめ、郷土料理処・呑処・カラオケルーム・遊技場・イベントホールなどを設置するのである。

ホールでの催物の主なものを挙げてみると、夕食が済んだ頃合いを見計らって（このタイミングが絶妙である）、〈郷土芸能ショー〉を開演する。太鼓・民謡・民踊等などであり、出演者は地元の愛好会のメンバー、もしくは旅館従業員であることも多いように思われる。奥入瀬観光の帰途、某旅館に泊まった際、津軽三味線ショーを鑑賞したが、その演奏者は翌朝、売店の売り子をしていた。そしてまた〈寄席演芸〉の場合もある。歌謡ショー・マジックショー・落語・大衆演劇などで、こちらはプロにより演じられるケースが多いようだ。

いずれにしても客がいったん館内に足を踏み入れると、出発するまで一歩も外に出ることなく、全てが館内で完結するように仕掛ける。客を囲い込むのである。「下履き型」に対して、「上履き型」といえよう。

「上履き型」の勢力が増大してくると、館外へ出る客がいなくなり、その結果、町内の物産

店・スナック・喫茶店・遊技施設などは早じまいせざるを得なくなる。浴衣がけでブラリ散歩、温泉情緒を味わうのを楽しみにしていた観光者に不満が残る原因である。いくら館内に疑似温泉街を演出したところで、所詮はイミテーションであり、本物の温泉街散策を通して得られる情緒には程遠い。

### Ⅲ. 大衆演劇公演

客を囲い込む方策（「おもてなし」の一環といえないこともないが）として催行される大衆劇団による公演について考察する。

#### 1. 大衆劇団

はじめに「大衆演劇」の定義をしておく。

『日本国語大辞典（第二版）』第八巻の〔大衆演劇〕の項を紐解くと、「庶民を対象とした演劇芸術の総称。剣劇、軽演劇、レビュー、ミュージカルなど、広く芸術性より娯楽性に重きをおいた演劇をさすが、その基準はあまり明確ではない。」とみえる。この説明からすると、吉本新喜劇も宝塚歌劇も、そして流行歌手が座長を務める芝居も、すべて大衆演劇の範疇に入る。しかしながら、本稿で取り上げる大衆演劇はもう少し狭い範囲のもので、「主として地方を興行して回る劇団によって演じられる、娯楽性豊かな演劇」を指すものとする。

大衆劇団の一座は親子、兄弟など、家族や親戚筋を中心に構成されており、座員数は10名前後が多い。また、劇団数は全国に120～130存在するといわれるが、休眠中の劇団があったりして、かなり流動的である。それに対して、常設劇場は平成27年（2015）3月現在、全国で44館（橋本正樹『上方芸能』第196号）である。ということは、約80の劇団が今日も全国の温泉旅館や健康ランド等の舞台を中心にして公演中であるという計算になる。

#### 2. 公演の実際

##### ①会場

会場はイベントホールや舞台付大広間である。全席椅子席の場合、畳敷き席の場合、前方が畳敷き席で後方が椅子席の場合、とさまざまであり、畳敷き席には座椅子が用意されていることもある。飲食しながら楽しんでもらうのを企図している所では、座机やテーブルがセットされている。

両サイドの壁面や最後部には売店・模擬屋台を設けている所が殆どである。また、舞台上演中はその営業を一時休止する所と、そうでない所と、これもいろいろである。

##### ②プログラム

昼の部は13時頃から「芝居（60分）と歌舞ショー（60分）」の2本立、夜の部は夕食が終わった時刻、すなわち20時頃から「歌舞ショー（60分）」のみを上演するのが一般的である。なかには午前の部として9時30分頃から11時過ぎまで上演する旅館がある。これは送迎バス発車時刻までのサービスとされている。

大衆演劇の狂言は、義理人情を中心にした「験の母」「一本刀土俵入り」といった股旅ものや、「鶴八鶴次郎」「滝の白糸」といった新派ものが多く、常設劇場ではそれらを楽しみにして来る客も多い。しかし、温泉旅館では観光の客を対象としているので、お涙ちょうだいものよ

りも、どちらかというとも朗時代劇や喜劇的要素の濃い芝居が好まれる。むしろ本命は歌舞ショーであり、なかでも女形の踊りが人気である。

なお、観劇料については、宿泊客は原則無料となっている。

### ③効果

旅館経営者・劇団・観光者の三者それぞれの立場から考えてみる。

まず、旅館経営者にとっては、客に対する「おもてなし」サービスの一環という面もあるだろうが、基本的には昼間時間帯の施設の有効活用が図れる、飲食など館内での消費の増加が期待できる、客にお得感をアピールできる、そして眼目であるところの、客の囲い込み策となる、等々を挙げることができよう。それに対しての経費面、一番大きな割合を占める劇団の出演料（一箇月公演の契約金額）は、どれくらい必要なのか。この点に関しては、企業秘密ということで部外者には不明である。それでも関係者の言葉の端々から推定すると、最低で約100万円らしい。人気劇団はもっと高額になるのはいうまでもない。費用対効果の面を考察するうえで、詳しい資料が欲しいところである。

劇団にとっての効果は如何であろう。まずは売興行（旅館経営側からいえば買興行）であるから収入が保障されていることである。常設劇場では分興行（歩合制）が殆どなので、入場料を劇場側と劇団側とで、一定の割合で分けることになる。それゆえに、収入がその時その時で不安定となる。大当たりの時は良いけれども、全くだめなこともある。そのような理由から、劇場公演よりも旅館・健康ランド公演の方を好む座長もいるくらいである。但し、劇場公演の時のような、御鬘肩筋からのハナ（祝儀）は期待できない。二番目の効果としては、芸を練り上げる場として活用できることである。劇場公演では若手は重要な役を貰いにくいだが、ここでは大役を任される場合もあって、これは芸上達の上で貴重な経験となる。

それでは観光者にとってはどうなのかというと、常設劇場ならば通常1500～2000円程度の入場料金が必要なところ、無料で観劇できるのでプラスα的な満足覚え、なにか得をしたような気分になる。

このように三者それぞれの立場でみていくと、温泉地全体の振興、共存共栄という点を別にすれば、取り立てて重大な課題となるような点は見当たらない。

### ④旅情をかきたてる大衆演劇

こんな体験をした。それは北陸地方の、とある温泉旅館でのこと。少し肌寒さが感じられる秋の夜。外は雨。湯上りのけだるい気分でごろごろしていると、「大広間で歌舞ショーが始まります」との館内放送があった。寝るにはまだ早いし、時間潰しにと会場へ行く。

既に始まっているが、観客はパラパラである。舞台では演歌に合わせて役者があて振りで踊っている。賑やかに舞台は続くのだが、観ている当方には一抹の寂寥感が湧いてくる。

♪ なんてこんなに 可愛いのかよ

孫という名の 宝もの （「孫」荒木良治作詞）

着流しで、前髪をパラリと垂らして、手には番傘。長年この世界に身を置いている人らしく、投げやりな踊り方のものであって、そのくせ切れ目切れ目はビシッと決める。扇子や番傘の扱い方は、なかなかのものである。

「孫」か。そういえば、家の孫はまだ起きているかな、土産には菓子よりもおもちゃだろうな、などとそぞろ我が家が恋しくなってきた。大阪市内には梅田・京橋や新世界周辺に大衆演劇専門の常設館があり、幾度となく観劇している。だが、そこでは愉快的な一刻を過ごしたこと

はあっても、しみじみとした情感に浸ったことはなかった。旅の途中のたよりなさ、外は秋の夜雨、まばらな観客、踊るは老いたる旅役者。そんなこんなが重なり合って旅情が掻き立てられたのであろう。これも温泉が絡む情感であって結構なものである。

#### IV. 活性化のための私案

温泉情緒を醸成し、温泉地の活性化に資するものとして芝居小屋を開設することは有効と考える。50～60人収容可能なスペースがあればよい。とはいっても、単独で設けるとなると、公演費を始め、施設維持管理費・広告宣伝費等は最低限必要となる。

そこで提案である。

旅館が大衆演劇公演を催行するのは、客に喜んでもらうためのサービスという意味もあるだろうけれども、一番の狙いは客の囲い込みと、館内での呑み喰いとといった消費を期待してのことである。それならば、いっそのこと、湯めぐり手形の例ではないが、他館の客にも観劇を開放しては如何なものだろうか。観劇料、飲食料など、多少なりとも収入増が図られるであろう。加えて、観劇にやってくる人、終演後に散策をする人、人が往来すれば温泉街は賑やかになり、一定の経済効果が得られる。自館も儲け、他者も潤う、そしてまた観光者も満足する。旅館、物産店、飲食店など、温泉地を形成するものが共存共栄の精神で温泉文化を守っていく、この考え方が肝要なのである。

外国からの観光者が温泉・温泉地を「ONSEN」として、多数訪れているけれども、彼らは湯の良し悪しもさることながら、異国ニッポンの温泉文化に深く関心を抱いている。浴衣を着て、下駄を履き、物産店を見てまわる。外湯に入ってみたいと思っているかもしれない。こうなってくると、日本人以上に温泉情緒に期待するものが膨らんでいるのである。

兵庫県は欧米やオーストラリアからの外国人観光者に人気の城崎温泉と、神戸・姫路城をつなぐコースを「ひょうごゴールデンルート」と名付けて、イギリスで開催する旅行博等でPRすること（日本経済新聞 2017. 3. 11 朝刊）。その城崎温泉においては、駅は玄関、町内の道路は旅館の廊下、各旅館は客室、物産店・喫茶店は旅館の売店・喫茶コーナーという発想で温泉観光を推進している。その結果、大谿川に沿ってしだれ柳が続くという純日本的な景観ともあいまって、情緒豊かな温泉地という評価を得ている。参考にすべきである。

#### 〈参考文献〉

- 「大衆演劇の風景」（『上方芸能』第145号～第148号所収） 山路茂則 『上方芸能』編集部 2002～2003
- 「大衆演劇と日本人の心理」（『アジアフォーラム』第30号所収） 山路茂則 大阪経済法科大学アジア研究所 2005
- 「舞台と客席が溶け合う世界」（『上方芸能』第170号所収） 山路茂則 『上方芸能』編集部 2008
- 「大衆演劇の魅力－池田・呉羽座とも関わって－」（『池田郷土研究』第19号所収） 山路茂則 池田郷土史学会 2017